

日本歯科医史学会

第 17 回（平成元年度）学術大会講演事後抄録

1) 消毒法の歴史について（Ⅲ）

ーテリヨンとハルステッドについてー

On the History of Disinfection（Ⅲ）

日本歯科大学新潟歯学部 本間 邦則

Kuninori Homma, The Nippon Dental University School of Dentistry at Niigata

1878（明治11）年，フランス医学アカデミーの会議で，L. Pasteur は「外科医は手術前に注意深く手を洗うばかりではなく，器械・材料をも高温で消毒すべきである」と述べた．これを聞いた O.R.S. Terrillon はいままで消毒の研究をすすめてきたが，とくに力を注ぎ実験をかさねた．その結果，1887（明治20）年に手術用器械や材料を 2～3 気圧で 140°C の高温で消毒すればまったく無菌となる．したがって器械は従来の木製のものでは廃して，すべて金属製にすべきである．そして手指を十分に洗って手術をすれば開腹術や内臓手術でも安全に実施できる．それ故，無菌法は外科手術大きく貢献するであろうと発表した．Terrillon は外科で無菌法を実施し，多くの業績をあげた．彼の臨床—サルペトリエール病院には多くの見学者が訪れた．その中にはイギリスの J. Lister やドイツの E. von Bergmann の姿もあった．

1890（明治23）年，ベルリンでおこなわれた国際医学会で E. von Bergmann は外科無菌法を講演し，これは翌年に C. Schimmelbusch によって詳細に報告された．

Terrillon は Pasteur の示唆により外科無菌法を開拓したが，Bergmann が外科無菌法の優先者として知られている．しかし，われわれは Terrillon

をはじめとするフランス医学をも忘れてはならない．

W.S. Halsted は Johns Hopkins 大学外科教授である．ヘルニアと乳癌の手術に新法を考案し，多くの業績で知られている．Halsted は1877（明治10）年に医師となると，ヨーロッパに渡り，T. Billroth（ウィーン）と E. von Bergmann（ベルリン）のもとで外科を学んだ．帰国してからは Johns Hopkins 大学の教授に任じられた．

1884（明治17）年，下顎孔伝達麻酔法に成功するが，同時にこれをニューヨークの歯科医 C.A. Nash に歯科臨床における麻酔の応用として伝えた．これをうけて Nash はコカインを注射して上顎中切歯の治療を無痛的におこなうことができた．これより歯科臨床に麻酔法が導入されることになった．

Halsted は1890年から1893年の研究で無菌ゴム手袋を手術に用いることを発表した．これによって外科手術は大きく進歩することになる．

Terrillon と Halsted の外科無菌法における業績はとかく忘れられ勝ちであるが，この足跡は医学史の1頁を大きく飾るものであろう．

2) 山口秀雄著「歯科美学」について

“SHIKA BIGAKU” Written by Hideo Yamaguchi

日本歯科大学 鈴木 雄士
新藤 恵久

Yuszi Suzuki, Nobuhisa Shindo, Nippon Dental University

「歯科美学」は日本歯科大学補綴学教授 山口秀雄によって昭和6年に発行されたものである．著

者は専門である補綴学を基本として、歯牙と、口と顔貌との心理学的な過程との因果関係について述べている。

総論に於ては調和という事が美的価値に大きく関与するとし、例えば中切歯には側切歯、犬歯には第一小臼歯が従属するという事が、調和すなわち美であり、欠損歯があれば当然それは美的欠陥である。又顔の表情筋についてその働きで顔貌美が変化する事や、歯牙の形態が機能によるものである事、顔面の諸器官が調和にどのような影響を与えているか等、詳細に顔面美学についてのべている。

各論においては歯科美学的考察として、能面、芝居の隈取、浮世絵の口もとについて論じている。能面における歯牙の主な特徴として、

- 中切歯と側切歯がほぼ同じ大きさである。
- 悪相のものは下顎前歯が露出している。
- 鬼蓄に類するものは歯牙と口とは神物化している。
- 後生安楽の相は歯ならびがそろっている。
- 乱ぐい、奇形の歯は悪相である。
- 口もとの力の有無は意志の強弱、体力の強弱の証である。

次に芝居の隈取における歯科美学的研究については、

- 口の周りを暗色にすると口が突出してみえる。
- 口を二つにわると動物の口になり、周りを曲線で包むと猿の顔になる。
- 口角を上昇させると笑の顔になる。

又、浮世絵の美人画については、初期のものは口もとが小さく結ばれているものが多く見られるが、徳川中期以後は口が開いた状態のものが多く、静的美から、動的美に移行したものと思われる。

その他、絵画、演劇、映画等にみられる顔貌と歯牙の美的観念について多くの研究の結果をのべている。

総括としては専門の補綴学における歯牙の配列と自然的義歯の調整法について多くの例をあげて説明し、義歯は総合的な造形医学であり統合の芸

術であるから、新時代の義歯は科学的基礎の下に目的に対して極めてレアリステックに構成しなければならないと結んでいる。

3) 柴田 信教授の著書について

On the Books Written by Prof.

Shin Shibata

日本大学松戸歯学部 ○山口 秀紀

山崎 宗与

金子 賢司

谷津 三雄

Hidenori Yamaguchi, Muneyoshi Yamazaki,
Kenji Kaneko, Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

日本歯科医学専門学校教授柴田 信博士は、「日本歯科医学専門学校一覧」の大正14年10月編には助教授で歯牙組織解剖学、解剖及組織実習、また昭和15年7月刊行によると当時は理事、解剖学、歯牙組織解剖学及び実習の教授、又教務課長も併任されていた。また昭和13年の歯苑社の「新刊歯科図書図録」によると柴田 信著、人類歯牙発育写真図譜、歯牙形態学、歯科用立体解剖写真図譜、また共著には歯科用最新人体解剖図譜、臨床歯科形態図説、歯牙組織発生学など多数の著書をみることができる。特に「人類歯牙形態写真図譜」は昭和3年11月10日初版、同年12月28日再版、昭和5年3月10日第3版、昭和6年3月10日第4版で当時のベストセラーであったと考えられる。

また、小児歯科学叢書の第二刊は柴田 信著「歯科栄養学」、発行者 今田見信、発行所、歯苑社で、昭和5年2月11日発行、非売品であった。本書は、昭和5年4月5日再版、同6年4月5日第3版、同7年4月5日第4版、同8年4月5日第5版で定価金貳円也となった、本書もまた当時のベストセラーのひとつと考えて良いと思われる。

本書の自序に、欧州対戦では医学、特に栄養問題に極めて多くの教訓がもたらされ、また、柴田先生自身、日本歯科医学専門学校における歯牙生